❊❊❊ 記　事 ❊❊❊❊❊❊❊❊❊❊❊❊❊❊❊❊❊❊❊

例会記録

六月例会　平成十五年六月二十八日
順天堂大学九号館二階八番教室

一、「医学館における医学考試について」　戸出　一郎

一、「『本草品彙精要』ローマ本・大塚本・ベルリン本の成立関係」　真柳　誠

七月、八月　休会

例会抄録

天台大師の医学
とくに十乗観法について

杉田暉道

今日の医学は分析的な思考方法による治療が主流を占めている。したがってわれわれの煩悩と疾病との関連についての研究は極めて少ない。この観点から演者は中国の天台大師智顗（五三八―五九七）によって撰述され、仏教史上最高の座禅作法の書として使用されている『摩訶止観』の第七章第三節「病患を観ぜよ」に述べられている、「止観（十乗観法）を修せ」に注目し、以下述べる検討を行った。ところでここに説かれている要点は、修行を行っているときに疾病にかかるのは、煩悩がわざわいしているからであるとし、したがってこれを徹底的に除去する方法を説いている。

それでは本法について概説しよう。先ず心の状態を陰入界境、煩悩境、病患境、業相境……菩薩境と十境に分け、それぞれの心境において、一、観不思議境　二、起慈悲心　三、安心　四、破法遍　五、識通塞　六、道品調達　七、助道　八、知次位　九、安忍　十、無法愛の十種類の観察法を行うのである。ここでは病患境の十乗観法について検討する。

先ず『観不思議境』とは、われわれの人生は刻々と変化して一刻も固定していない。これを素直に受入れて観察できれば、清浄な悟りの世界に到達でき、疾病も治ると説いた。

『起慈悲心』とは、十乗観法の中では特異な章で、看護の心得を説いている。その方法には一、空観による方法　二、仮の観による方法　三、中道観による方法がある。一、空観による方法とは、体の健康状態は良いときもあり、悪いときもあって常に変動するから、疾病にかかってもそれがほんとうの疾病かどうかわからないから、気にしないで素直に疾病を受入れて静かな気持ちで療養するように、看護人は仮に子供と同じ疾病にかかった親が子供にさとすように、患者に上手

に説くことをさし、二、仮の観による方法とは、患者の疾病はほんとうの疾病ではなく、煩悩を持っていることからそれにわざわいされて疾病にかかったような状態になっているのであると考え、早く煩悩を取り去って清い心で療養するように、看護人は仮に子供と同じ疾病にかかった親が子供にさとすように、患者に上手に説くことをさし、三、中道観による方法とは、煩悩の根元を取り去り、清い心で疾病の実体を観察し、素直に疾病を受入れ、悟りの境地を体得すれば疾病は治るということを、看護人は仮に子供と同じ疾病にかかった親が子供にさとすように、患者に上手に説くことをさすのである。さて現在医療および看護のあり方についていろいろと論議されているが、ここに説いている内容はこの問題について十分に適確な答えをしめしているといえよう。

『安心』とは修行をしていて疾病にかかったとき体をリラックスして身体を正しく保ち、心を安定させて清い心で疾病を観察できるようになれば疾病は直ちに治ることをいう。この方法で疾病が治らないときは、『破法遍』の方法で観察を行う。これには従仮入空観、従空入仮観、中道正観の三種類の方法がある。従仮入空観とは、感冒を例にとって説明すると、感冒の症状には多くの種類があり、現われる時期にもバラツキが見られることを正しく観察して認識することを仏教的には仮という。このように症状には種類が多く、変動を示し固定していないが、症状そのものは存在する。これを認識することを仏教的には空という。すなわち仮から空の認識に入るから、従仮入空観である。従空入仮観とは感冒にかかると症状が現われることを認識することを仏教的に空といい、その症状には多くの種類があり、出現の時期も一定しないことを認識することを、仏教的には仮という。すなわち感冒では症状が出現するという空の認識から仮の認識に入るから従空入仮観である。この思想は、疾病を診断するのに症状と疾病の実体との関連を適切に表現していると思われる。すなわち、従仮入空観は症状から疾病の実体を把握する方法であり、従空入仮観は実体を明らかにするために症状を詳しく検討する方法であると考えられ、診断学の面からみて極めて有用な観察方法である。中道正観とは、空の方にのみ、または仮の方にのみに観察がかたよらないで、バランスのとれた観察の修行を行い、正しい悟りを得て病気も恢復することをさす。

これでまだ疾病がまだ治らないときは『識通塞』を説き、これでも効果がないときは『道品調達』を説くのである。これでも治らないときは『助道』の方法を行う。これは該当の僧は知能々力が正常より劣っているので、今までの修行に別の修行を加えて観察の修行を行う方法である。かくして疾病の治癒過程を正しく判断することを『知次性』といい、まだ悪い誘惑があるのでそれを排除して修行することを『安忍』という。さいごに悟りの境地に達し、疾病もほとんど治ったが、まだかすかな気ががりが残るので、これを完全に除去して清浄な悟りを得、疾病も全快した状態を『無法愛』という。

以上、十乗観法を読んでとくに注目したいのは『起慈悲心』および『破法遍』に説かれている観察の思想が現代の医療に極めて有益であるということである。

（平成十五年五月例会）

❊❊❊紹　介❊❊❊

榊原　悠紀田郎　著

『歯科保健医療小史』

「こんなにわかりやすい歯科の歴史書は初めてだ」

本書を一読した時の感想であった。

わが国の歯科の歴史研究は、昭和十一年十一月に、明治二九年の歯科医師法公布三十年記念事業としての「歯科医事衛生史」の編纂からはじまった。その後も歯科資料の収集、出版が進められていたが、第二次大戦の激化と敗戦による混乱のために中断していた。

再開は、昭和四一年十一月の「歯学史集談会」の発足からはじまった。そして現在の「日本歯科医史学会」に成長した。

筆者は「集談会」の発足時からの委員で、以後、数々の研究成果を発表され、現在は、学会運営の最長老として後進の指導にあたられている。

本書は、筆者が歯科界に入ってから収集された膨大な資料をもとに大学での授業に使われた講義録の集大成である。しかも、これは三十数年間、毎年新しく作成されたものである。したがって、内容の豊富さはもとより、随所に新しい試みが見られる。

本書は、七章よりなる。古代、中世、近世の章の後半には、西洋、日本、東洋の医事の比較年表が付けられ、四章の明治以降の章には、日本と諸外国の比較年表がついている。そのために、日本の医療の歩みと、諸外国のそれとの相互関係が、混乱なく理解できるように構成されている。

第一章の古代の項には、紀元前二千年ころペルーの開頭術や古代フェニキアのブリッジなど興味ある写真が載っている。

第二章の中世では、五世紀に伝来した中国医学が充実した九世紀ころの『医心方』などに見られる口歯病の記述がある。この宮廷社会中心の社会はやがて武家、庶民の時代となる十世紀ごろには「絵巻」が独自の発展をする。『病の草子』に描かれている歯疾患に悩む人々の姿などが載っている。

第三章の近世では、ヨーロッパでの近代歯科の誕生と、江戸時代の日本の歯科療法事情を詳述している。特にわが国固有の木床義歯と米国の初代大統領ジョージ・ワシントンの義歯や東西の抜歯風景を図で比較しているのも興味深い。

第四章の近代では、幕末のオランダ医学の浸透から、変化していくわが国の医療の推移に触れ、一方、歯科領域では、発展する米国の歯科事情と、これがわが国の歯科医療の近代